

ささやかな務めを終えて

随 想
〰〰〰〰〰〰

郡 司 好 喜*

1. メモ帳から

昭和 44 年 11 月編集委員、45 年 4 月堀川一夫主査のもとで講演大会分科会の幹事を仰せつかり、講演大会との長い付き合いが始まりました。引き続き下川敬治、安藤卓雄のすばらしい両先輩のご指導のもと 51 年 3 月まで幹事、51 年 4 月から 55 年 3 月まで主査として分科会の世話をさせていただきました。

45 年春季大会の一般講演は 245 件ではぼ安定した講演数でありましたが、48 年秋季に 418 件と急増したのを契機に増加の一途をたどり、55 年秋季の 100 回大会では 725 件の多きに達しております。こうした隆盛は、鉄鋼業の発展および鉄鋼生産技術のいちじるしい進歩が基礎になっていることはもちろんであります。講演大会分科会、編集委員会および事務局のご努力の成果であると思っております。この間分科会として多くの努力を重ねて参りましたが、その主なものを列挙すると次のようになります。

- (1) ジュニアパーティー (昭和 45 年 10 月)
- (2) 概要集への投稿 2 ページまで緩和 (昭和 47 年春季)
- (3) 大会参加費の徴収および概要集の有料化 (十分検討するも実現せず)
- (4) 概要集の用紙の改善 (昭和 50 年 10 月)
- (5) 討論会の改良 (51 年春季分から 1 年半前に募集)
- (6) ポスターセッション (昭和 52 年 4 月)
- (7) 外国人会員の講演の積極的募集 (昭和 54 年 1 月)
- (8) 概要集の英文化 (昭和 54 年)
- (9) 100 回記念大会 (昭和 55 年 10 月)
- (10) 概要集の 2 分冊化 (昭和 56 年 4 月)
- (11) 講演大会運営の改善 (適宜改善)

2. 歴史を創るための努力

“昨日と今日は明日のためにあり、歴史は創るべきものである” というのは私のモットーであります。以下に、分科会委員の皆様と歴史を創るために重ねてきた努力のあとを振り返つてみることにいたします。

講演数と講演内容：45 年春季大会ではわずか 245 の講演が 8 会場で行われ、講演数の少なさを嘆いていたのですが、今では大会運営に支障をきたすほどに増加しております。大きな原因は鉄鋼生産技術の進歩にあるこ

とはもちろんであります。分科会としても関連分野の講演を多くするといった直接的な努力の他に、間接的な努力を数多く重ねてきました。そうした努力が実つて今日の隆盛となつたのであります。会場の確保が困難となつてきたこともあり、質の悪い講演が多いとか講演時間が長過ぎるといった厳しい意見が噴き出してきました。

そうした意見については分科会内で激論を重ねつつ検討してきました。研究者、技術者は自分達の成果を発表するために多くの思考を繰返しその内容を充実させようと努力しますが、その過程が直接科学技術の進歩につながります。さらに、講演、聴講および討論の過程で非常に多くの知識が得られることから、講演発表することは多くの会員の強い願望となつております。また、20 分という発表時間も、他学協会の実態を検討しました結果必要最小限の時間であることが分かりました。

質の悪い講演が多いと言つてもこれを篩にかけることは大変に困難であります。たとえそれが可能となつたとして、そのことが牛の角をためる結果になりかねませんので、悪貨が良貨を駆逐する事態が起こらない限り自然淘汰を待つべきと考えております。このようにすばらしい姿に成長した現在の講演大会を安易な妥協で打ち壊すべきではありませんし、物理的な障害には他の手段で対処すべきでありましょう。

講演概要集：概要集が多くの国々で引張りだこであり、翻訳されて市場に出ると聞いております。このことはとりまおさず概要集の価値の高さを意味しています。わが国の鉄鋼生産に関する高い水準の科学技術が盛り込まれ、それを理解するのに十分なものであるのが現在の概要集であろうと思います。2 ページにすれば内容がよく分かるというので 2 ページまで書けることになっていますが、2 ページの投稿の少ないのは 1 ページが適当であることを示しております。また半ページにすれば経費節約になるという声もありますが、それでは単なる情報のためのアブストラクトになつてしまうことは目に見えております。このようにして、2 分冊という特異な形式ではありますが、価値の高い概要集ができ上がつております。

なぜ概要集を有料にしないのか？ 講演大会に参加費を取らないのか？ こうした質問は多くの人から浴びせられます。こうした疑問に分科会でも 2 度、3 度と激論を重ねましたし、今後も繰り返していただろうと思いま

* 金属材料技術研究所 工博 (前講演大会分科会主査)

すが、答は非常に簡単であります。鉄鋼協会が全く独自の組織であり、独自の方法で運営されているからであります。そしてこの方式が科学技術の進歩に大きく貢献しているのですから、他学協会や外国のそれを形式的に真似る必要は全くないはずであります。私の意見では、この方式が非常に進歩したものであり、いまさら古い形式にこだわって退歩する必要はないと思うのです。

ポスターセッション：研究室の雰囲気の説明し討論できるのがポスターセッションであり、研究発表の原点と言え形式であると思います。短い時間に説明と討論を行う現代の発表方式は、講演数の増加による発表時間の減少とともにますます形式化し、十分な討論ができないということで聴講者のみならず講演者にも大きな欲求不満を与える結果となっております。討論会のような特殊な形式がないわけではありませんが、これではごく一部しかカバーすることはできません。今後の講演数の増加をも予測し、分科会として十分に検討してこの発表形式を試験的に採用したのでありますが、アンケートや座談会で得られた意見から、聴講者のみならず講演者からも圧倒的に支持されていることが分かりました。

会場確保の困難さ、設営の煩雑さ、その他 2、3 の欠点がありますが、今後発展的な試験を繰り返していくつかの欠点が克服できるならば、自信をもって実行できる発表方法であろうと思います。いつの日か、広い会場の方々のブースに多くの会員が群がり、時の経つのも忘れて熱く議論を続ける光景が見られるだろうと楽しみにいたしております。

ジュニアパーティー：私が分科会に関係して与えられた最初の大きな仕事はこのジュニアパーティーでありました。その主旨は“平均年齢の高い懇親会に参加しにくい若手の研究者、技術者の集い”ということであり、この主旨に 100% 賛成の私は、大きな期待と情熱でその発展に努めたのでありますが、その夢の実現には長い時間と厳しい努力を要しました。初期の頃は積極的な参加者も少なく、前日までの参加申込者が 20 人以下という淋しい時もありました。当時、大会の 2、3 日前になりますと分科会の委員の方々にお電話申し上げ、近くの会員に出席を勧誘していただく一方、事務局でも同じような努力をして下さいました。当日は受付に立つて会員に呼びかけることが常となり、先輩から“客引き”とからかわれて人知れず涙を流すこともございました。またパーティーを盛り上げるために壺声を張り上げることを強要して若い会員のひんしゆくを買ったり、大学のお嬢さん方のバンドの出演をお願いして関係する方々に大変なご迷惑をおかけするなど、尋常でない努力に明け暮れたものでございます。

こんな有様でしたので分科会の反省会では常に議論の中心となり、何度か中止の意見も出てきました。しかしその都度“この集いは鉄鋼業の将来に必ずプラスになり

ます”という私の頑固な主張を通さしていただき、分科会の方々にご協力をお願いしてきたのでございます。こうして 5 年を過ぎる頃から、委員の方々や事務局の努力が実りはじめ、ジュニアパーティーの意義を理解する強力な支持者が全国的に拡がり、10 年目には会場に収容しきれないほどの会員が集まるようになりました。現在では、この集いの意義を十分に理解する若い会員 100 数十人が集まり、科学技術や人生論を時の過ぐるのを忘れて議論し、友情を深め合っている人の輪がたくさんできるほほえましいパーティーになっております。

初期の目的を達するまでに約 10 年、どんなに立派な理想でもそれを理解して貰うまでには大変長い時間を要することがあるものです。私自身多くの人々のご指導とご協力によりジュニアパーティーが定着するまでに味わった苦しみの中で学んだものは、計り知れない貴重なものであるように思っております。先輩の人達が多く集まる懇親会が過ぎし日を振り返る集いであれば、ジュニアパーティーは未来の夢を語り合い友情を深め合う集いでありましょう。日本の鉄鋼業の発展が協調と秩序ある競争によつてもたらされたことを思えば、二つの集いの意味がいかに大きいか論ずる必要もないでしょう。もちろん二つの集いが一緒に開催されるのが理想でありましょうが、これまでの経緯を念頭に置く限り、その実現は至難の業のように思えます。

こぼれ話：略号を登録する原稿の是非……新しいプロセスとか鋼種が開発されると AB プロセスとか XY 鋼という単語を使用してタイトルを作りたくなるのが人情ですが、これは学会の憲章“学会は宣伝の場にあらず”に触れることとなります。学会に発表すること自体が宣伝を意味することからすればこれは明らかに矛盾でありましょう。分科会では繰り返し議論しましたが、無制限に許せばローマ字で書かれるプロセスや鋼種が氾濫して收拾がつかなくなるということで、よく知られたもの(例えば LD 法、Inconel など)だけが許されております。そのために、よく知られているものの基準の難しさ、かえって長い表現になるなど多くの欠点が生じております。あまり遠くない将来そうした制限が撤廃される時代が到来するだろうと期待いたしております。

スライドの写真撮影……講演会場でスライド図面を撮影する光景は方々の会場で見られたものでありますが、最近は禁止されております。分科会での長時間の議論では、撮影されるということは講演の価値の高さを示すという意見と、撮影されると詳細なデータを発表しにくいという意見に分かれ收拾がつかなくなるほどでありました。結局、講演のムードを壊すという理由で現在の姿となつたのでありますが、必要な場合には著者に依頼してデータを入手できる原則には変わりありません。

100 回記念大会……55 年ぶりに訪れた 100 回大会をお祝いしようということで一年半も前からその準備にか

かりました。歴史を未来につなげることを前提に最初は盛りだくさんな行事を計画したのですが、しだいに整理されてご存じのような記念行事が行われました。記念誌はすべてのページを読んでいただけることを前提に新しいスタイルにいたしました。それだけに編集委員の方々の苦勞は大変なものであります。また、21世紀の鉄鋼業を語るに相応しい座談会のメンバーを構成することは至難の業とも言えるものでしたが、田畑専務のご尽力により堺屋太一さんのご出席が実現したことで素晴らしい座談会が開催できる運びとなりました。

3. 未来のためには投資が必要

投資を怠つた企業が衰退し、“奢る平家は久しからず”の喩にもあるように油断は絶頂期に芽を出します。わが国の鉄鋼業が群を抜いて世界のトップにあると同じく、鉄鋼協会の業績も素晴らしいものであります。その活動範囲は、今日的な問題の解決から将来のための活力養成まで幅広いものとなっております。今日的な問題は、講演大会、共同研究会、基礎共同研究会、西山記念技術講座などにおいてとりあげられ、問題の討論と情報の交換が行われております。その結果は、直接的、間接的にフィードバックされ、世界を驚嘆せしめる生産技術発展の礎となつていることは万人の疑わない所であろうと思えます。こうした業績は、全く独自の協会の構成と運営によるものであり、これを実現させた諸先輩の慧眼と努力に負う所がすべてであろうと思えます。

絶頂期にある鉄鋼業でも21世紀における不安とか新しいプロセスに対する心配などがささやかれ始めております。こうした不安感のある間は油断も起こりにくいで将来への希望も残っておりますが、感ずるだけでなく夢を育てる積極的な手を打つべき時が近づいているように思えます。世界中の国々は日本の鉄鋼業の経営および技術を目標に厳しい努力を続けております。資源0のわが国には技術の進歩以外に競争する手段のないことは理解されておりますが、具体的な対応が行われているようには見えません。そのためにも、鉄鋼協会は今日の問題だけでなく将来に目を向けた活動を行うべきだろうと考えます。

一万人弱の一般会員数は永年にわたって続いておりま

すが、このことは独自の運営に甘えてその努力を怠つている証拠のような気がいたします。また、鉄鋼業を支える人材を得るための教育、宣伝を怠つてはいないでしょうか。そうした努力を必要としない時代は過ぎ去つていきます。とくに若い世代の人生指向を考えれば、そうした努力なくして優れた人材を得ることはますます難しくなることでしょう。

外国のシーズを育ててきた歴史は終り、新しいシーズを見出す時代に入つています。その手法は難しいかも知れませんが、現在の鉄鋼協会にはそれを成功させる基礎が十分あるように思います。新しいプロセスの開発などに英知を結集する努力は今日にでもとりかかるべき問題ではないでしょうか。

外国とのつき合いをもつと活発にすべきでありましょう。特定の国との交流もさることながら、鉄鋼協会がリーダーシップをもつた幅広い交流を積極的に進めるべきだと思います。さらに、これまでに得られた科学技術の成果を文化として輸出する努力をすべきでありましょう。出版物が翻訳されて市場に出されるのを座して眺むるよりは、積極的に輸出し、鉄鋼先進国として尊敬されるよう多くの努力を払うべきだと思います。

その他将来に向けて考慮すべき問題は数多くありましようが、心すべきはこれからの問題について払われる努力が直接報われることは少ないことであり、投資の効果は長い年月を経てから現れることであります。しかも、そうしたことは過去の歴史の中で十分に経験したことであります。投資を怠つて凋落の憂目を味わうよりは、勇気をもつて未来へ挑戦すべきであり、ためらうことなく行動すべき時であろうと思えます。

きわめてささやかな務めではありましたが、本当に楽しく働かせていただきました。ともすれば単細胞的な発想で周囲を困らせてきた私を指導し、支援していただいた荒木透、松下幸雄、堀川一夫、長嶋晋一、田中良平の各編集委員長、下川敬治、安藤卓雄の両主査、岡部俠児、細井祐三の両幹事ならびに各委員の方々、田畑新太郎専務、吉田道一常務、佐藤公昭部長、玉井金治部長、下川成海課長、桑原良太主任をはじめとする協会職員の皆様に心からお礼申し上げます。